

## 調査結果から見える “大館市民基礎力や大館市民実践力の育ち”

第5号からの  
の続き

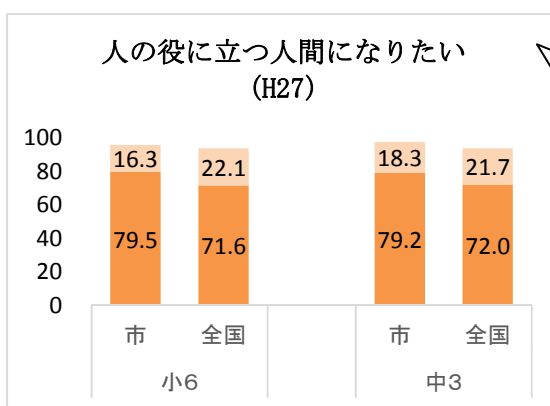
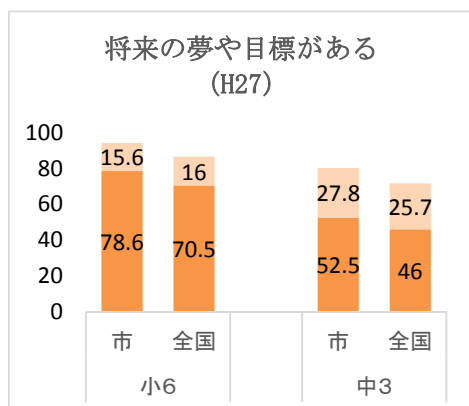
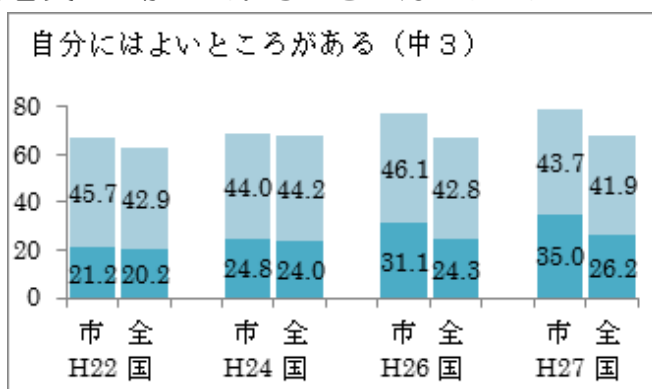
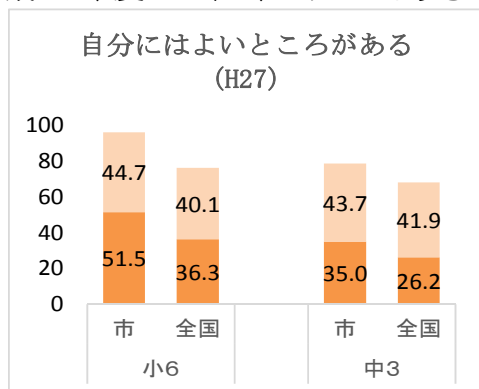
本市独自の教育理念である「大館ふるさとキャリア教育」に取り組んで5年となり、学校経営やメインとなる活動である「百花繚乱作戦」、「おおだて型学力」育成に向けた授業改善が進められています。その成果は、子どもたちが学校や地域で活動する中で確実に見えており、保護者だけでなく、地域や市民の方々にも広く認識されています。地域で大人と共に働く・活動する経験を通して、地域のために役立っている実感や「自分にもできる」という自信が生まれ、子どもたちの姿は、まさに、未来大館市民の原型。学校での学びが地域で発揮され、その学びの手応えが学校での学びにつながり、夢や目標をもって意欲的に学習する姿へとよい循環を生んでいるのではないかと思います。

また、学年が上がるにつれて、賢く、頼もしく成長している中学生、高校生、大学生の姿こそ、ふるさとキャリア教育の成果として実感されます。

\* グラフは、全国学テ児童生徒質問紙、または学校質問紙  
下「当てはまる」上「どちらかといえば当てはまる」

### 7 高い自尊感情・自己有用感～人間力の育ち～

先進諸外国に比較して、日本の青少年は自尊感情が低いと言われてきましたが、本市では、「自分にはよいところがある」と答える小6は96.2(全国比+20P)、中3で78.7(全国比+10P)となっています。中学生になると自分を肯定的に受け止める生徒が減りますが、平成22年度から経年で追ってみると、着実に増加していることが分かります。

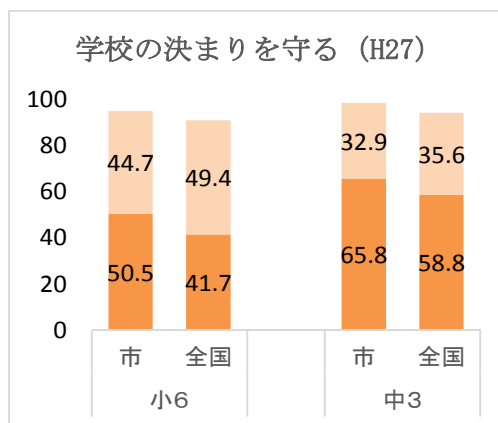
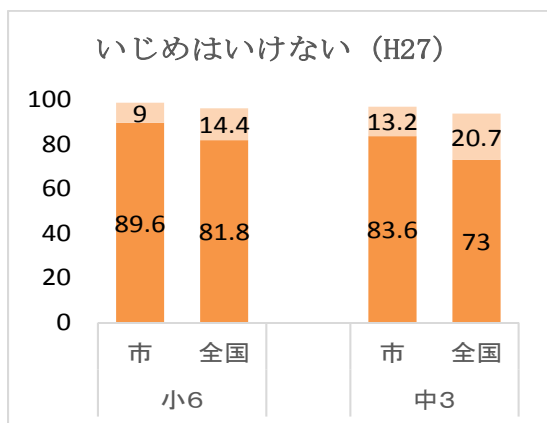


「夢や目標」に迷い、悩む思春期の中学生ですが、「貢献」の気持ちは強く持っていることが分かります。

## 8 高い規範意識～落ち着いた学校生活と安定した人間関係～

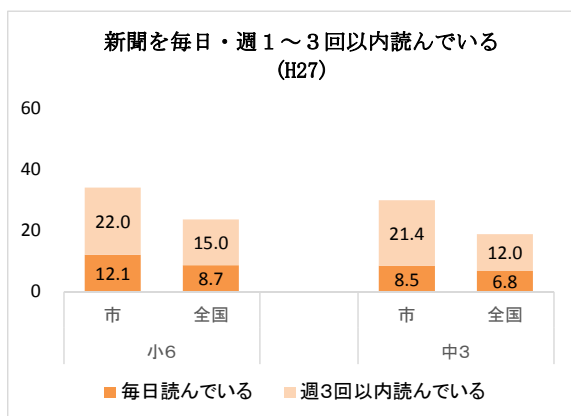
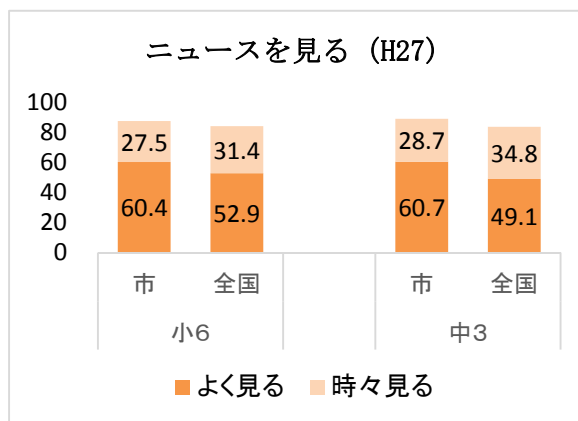
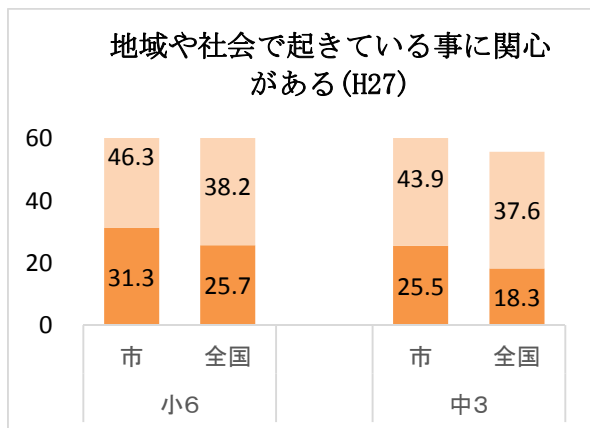
小・中学校は、はつらつとした朝の挨拶運動、そして始業のベルとともに朝読書の静寂から学校生活がスタートしています。どの学校も落ち着いた学校生活、学習態度であり、授業の中では男女も仲良くペア学習やグループ学習をしている場面が見られます。年3回実施している「いじめ調査」では、200件余りのいじめ申告がありますが、それだけ本人も周囲もいじめへのアンテナが高いと受け取ることができます。全国的でも、以前より割合が上がっていますが、それ以上に大館の子どもは「いじめは、ぜったいダメ！」と思っています。

また、「学校の決まりを守る」については、小学生よりも中学生がさらに「守っている」と答えています。学校訪問で見る中学生の凛とした振る舞い、ぴりっとした態度はこの高い規範意識からにじみ出ているものと嬉しく感じます。

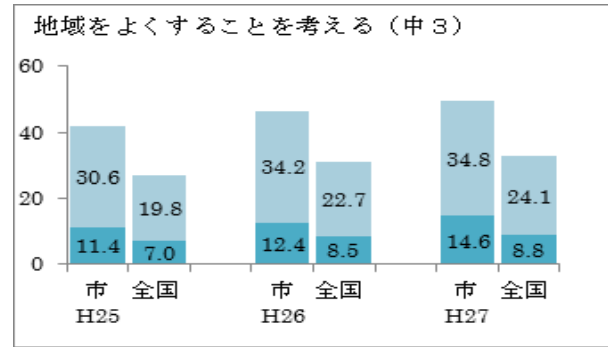
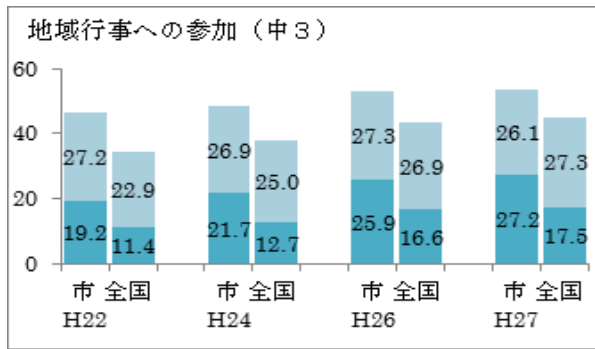


## 9 地域への関心の高さ「地域貢献したい」～市民意識の高まり～

各校の百花繚乱作戦、子どもハローワークへの参加により、「大館盆地を教室に、市民一人一人を先生に」様々な活動に取り組んでいる子どもたちです。また、教科においても大館を題材にしたり、大館の課題について解決を考えたりする授業が数多く見られます。質問紙からも、子どもたちの大館市民としての自覚や大館への関心が確実に高まっていることがわかります。



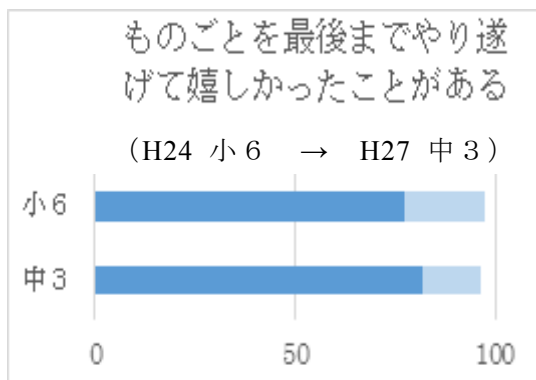
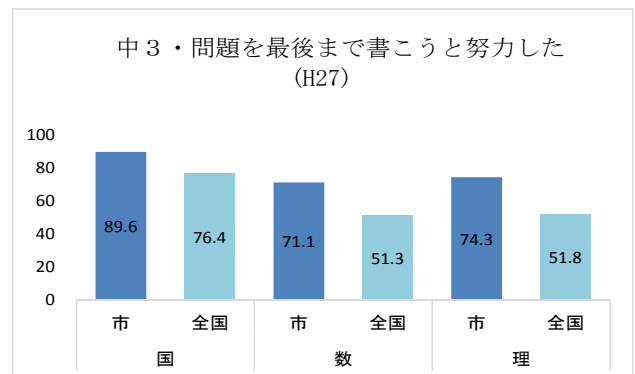
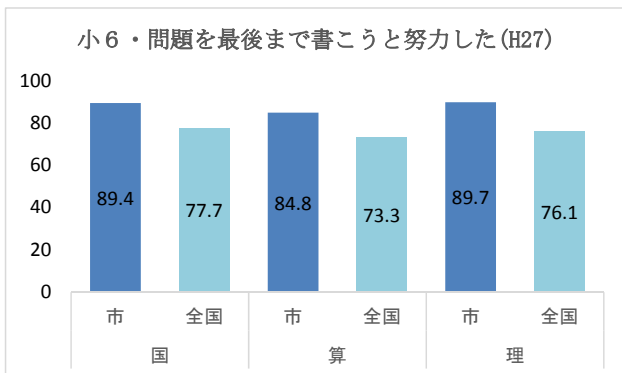
小学生が「今住んでいる地域の行事に参加している」割合は77.3% (全国66.9%)です。その年によって割合は7～8割を上下しますが、全国よりも10～12p上回っています。注目すべきは、中学生はH22年度から着実に大館を思う気持ちや、実際に参加して活動する「大館市民実践力」が身に付いているのではないかと思います。



## 10 徐々に育っている粘り強さ・たくましさ

ここ10年来の大館の子どもたちの課題は、「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦」するたくましさ、チャレンジ精神、一步前に踏み出す積極性が挙げられてきました。素直でまっすぐに育っている長所は大事にしながらも、各校では自校の課題に向け教育活動全体を通じて取り組んできました。

学習面で言うと、「学力検査で、最後まで解答しようと努力」した小学6年、中学3年生は全教科とも全国よりも高い割合になっています。中3においては、3教科で7～9割が課題に粘り強く取り組んでいるのは、すごいことだと思います。



現在の中3は、小6でも同じ質問に答えています。小学生よりも中学生の方が肯定的な回答が減るのは一般的な傾向ですが、この質問に関しては、さらに伸びていることが分かります。教育活動全体の中で、難しい課題、大勢でのチームワークがないと出来ない課題などを経験していると思いますが、充実感や達成感を十分感じている中学生の姿が見えてきます。

「SHI・N・KA」1～5号は、大館市教育委員会 HP から  
「最新情報・お知らせ」→教育研究所「刊行物」からダウンロードできます。

## ○大館市教職員実践発表会～ふるさとキャリア教育フォーラムII



昨年度は、教育関係者以外の方々から、ふるさとキャリア教育についてのご意見を伺いましたが、今年をあえて子どもたちの姿から、この5年の実践を振り返る場としました。

嶋野道弘先生（文科省で生活・総合の調査官、主任視学官を歴任、現文教大学教育学部教授）から、12月に来館の折り、「ふるさとキャリア教育」や「おおだて型学力を鍛える授業」について、高い評価をいただきました。ビデオメッセージで省略した部分を紹介します。

嶋野先生：「大館の教育はすごい！」何がすごいか3点挙げると・・・

1点目・・・理念・ビジョンがしっかりして、それを言葉で明示している

2点目・・・組織やシステムができており、実際に機能している

3点目・・・成果が広報され、共通理解できている（例えば学校報、地方紙）

当日は、教育雑誌取材のほかに、釈迦内小の授業を一巡させていただきましたが「大館の場合は、ふるさとキャリア教育によって、学ぶことの意義や目的が子ども自身の気付きとなっている。実は、これが学力のベースであり、繰り返しドリルで身に付ける学力とは違う。また、授業では板書、どの教室にも「めあて」や「まとめ」が提示されているが、画一化、形式化せず、学年の実態や先生の個性が加味されている。先生方で共通理解の上に共通実践されている『学校力』を感じた。」と、興奮気味にお話してくださいました。

学力の定着については、「まとめと振り返りとの違いをきちんと押さえて日々行われていることに、秋田の学力の強みがある」ともおっしゃっていました。

釈迦内小の授業が、先生方のチャレンジによって、チームで課題解決をする授業になっていたすばらしさは勿論ですが、大館市内の全小・中学校にも当てはまる評価だったと思います。「大館の当たり前のレベルは高く、すごい！！全国を回って、たくさんの教育実践を見ているが、こういう実践、授業は初めて見た。」嶋野先生のこの言葉は、市内全小・中学校に当てはまることです。



## ○国立特別支援教育総合研究所 海津亜紀子主任研究員の来館

去る11月27日、文部科学省の附属研究機関である特総研から、大館の特別支援教育体制（桂城小通級指導教室と小学1年悉皆の「ことばとまなびの小テスト」）について、視察がありました。義務教育のスタート段階から学習障害に気付き、特性に応じた指導方法を取り入れる方向性を探るもので、貴重な指導助言をいただきました。（海津主任研究員が開発したMIM多層指導モデルは全国に広がっているプログラムです。）

2月1日には、文部科学省事業「発達障害の可能性のある児童生徒への早期支援研究事業」の実践報告として、教育研究所が厚生労働省で発表をします。スクールカウンセラーの活用、教材や図書の購入、通級指導教室の教材は、この事業によって整備しているものです。事業は3月をもって終了しますが、2か年で準備した教材・図書等は、来年度以降も随時貸出が可能です。今後も「どこでも支援教育・だれでも支援教育」を継続していきます。